研　究　紀　要

第 4 号

1988

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目　　次

神子柴文化をめぐる諸問題
——　先土器・縄文の画期をめぐる問題(一)　——　栗島義明……1

縄文時代の土偶装飾をもつ土器について　浜野美代子……93

北武蔵における古瓦の基礎的研究II　昼間孝志・宮　昌之
木戸春夫・赤熊浩一……109

関東における中世在地産土器について　浅野晴樹……197

ガラス小玉の製作と着色技法について
——御伊勢原遺跡出土のガラス小玉を中心として——
立石盛詞・井上　巖……213

関東における中世在地産土器について

浅　野　晴　樹

はじめに
1　在地産土器の研究と現状
2　在地製品の構成
3　在地製品の変遷
4　在地製品の系譜
おわりに

はじめに

埼玉、群馬、栃木の三県を中心に、中世前半に在地産と思われる壺・片口鉢が非常に濃密に分布することを明らかにしたことがある(註1)。その時点で十分にこれらの製品について分析を行っていなかったため、未だにその実態を、明確にするに至っていないのが現状である。そして、これらの製品がどのような発生の過程を経て、どのように変質していったのかを解明する必要があり、分類についてもさらに考えて見る必要がある。それは強いて言うならば、15世紀に至り当該地域で増大する瓦質の製品についての系譜の解明にもかかわってくるものと思われる。いずれにしろ、今回は在地産の製品の詳細な分類と編年作業などを十分に行うに至らなかったので、在地製品の種類や研究の現状について埼玉および北関東を中心に少し触れてみたい。

1　関東に於ける在地産土器の研究と現状

先に述べたように、関東においての中世土器研究はまだ緒についたばかりの状況といってよいであろう。また年々資料の増加を見るのだが、それらの分析は十分されていないのが現状であり、東海諸窯など出土遺物の共伴関係、そして年代観に目が奪われてしまう状況である。しかし現実に年とともに増加する資料は、在地産と思われる土師質土器や瓦質土器ばかりである。そこでまず、在地産の製品についての研究の状況について見てみたい。

在地産と思われる12世紀代の資料に関しては、鎌倉に於いて12世紀末期の資料が確認できるほかは、他の関東諸地域では経塚資料以外に殆ど資料を確認することができない状況である。そのため多分に中世でも前半代は空白部が多いことは現状ではいかんともしがたい状況である。そのような中で、服部実喜氏による土師質土器の編年作業(註2)は、中世全般にわたっての作業であり、13・14世紀においては比較的詳細な分類が行われているが、主に鎌倉中心の作業のため、14世紀後葉以降については、資料的な不十分さが指摘できよう。しかし、この土師質土器の皿は中世前葉に於いて汎関東的に分布している可能性があり、資料の比較の上でその後の研究に有効な資料を提供している。さらにこの皿型土器は、北関東を中心とした地域では大江正行氏による編年作業がある(註3)。大江氏の編年は中世後半から戦国時代にかけてのものである。また安田龍太郎氏は栃木県の資料を中心に土師質土器と内耳土器を中心とした15・16世紀の年代観と問題点について触れている(註4)。貯蔵形態については、筆者が、埼玉、群馬、栃木県を中心とした、分布と特色について触

関東における中世在地産土器について

浅　野　晴　樹

はじめに
1　在地産土器の研究と現状
2　在地製品の構成
3　在地製品の変遷
4　在地製品の系譜
おわりに

はじめに

埼玉、群馬、栃木の三県を中心に、中世前半に在地産と思われる壺・片口鉢が非常に濃密に分布することを明らかにしたことがある(註1)。その時点で十分にこれらの製品について分析を行っていなかったため、未だにその実態を、明確にするに至っていないのが現状である。そして、これらの製品がどのような発生の過程を経て、どのように変質していったのかを解明する必要があり、分類についてもさらに考えて見る必要がある。それは強いて言うならば、15世紀に至り当該地域で増大する瓦質の製品についての系譜の解明にもかかわってくるものと思われる。いずれにしろ、今回は在地産の製品の詳細な分類と編年作業などを十分に行うに至らなかったので、在地製品の種類や研究の現状について埼玉および北関東を中心に少し触れてみたい。

1　関東に於ける在地産土器の研究と現状

先に述べたように、関東においての中世土器研究はまだ緒についたばかりの状況といってよいであろう。また年々資料の増加を見るのだが、それらの分析は十分されていないのが現状であり、東海諸窯など出土遺物の共伴関係、そして年代観に目が奪われてしまう状況である。しかし現実に年とともに増加する資料は、在地産と思われる土師質土器や瓦質土器ばかりである。そこでまず、在地産の製品についての研究の状況について見てみたい。

在地産と思われる12世紀代の資料に関しては、鎌倉に於いて12世紀末期の資料が確認できるほかは、他の関東諸地域では経塚資料以外に殆ど資料を確認することができない状況である。そのため多分に中世でも前半代は空白部が多いことは現状ではいかんともしがたい状況である。そのような中で、服部実喜氏による土師質土器の編年作業(註2)は、中世全般にわたっての作業であり、13・14世紀においては比較的詳細な分類が行われているが、主に鎌倉中心の作業のため、14世紀後葉以降については、資料的な不十分さが指摘できよう。しかし、この土師質土器の皿は中世前葉に於いて汎関東的に分布している可能性があり、資料の比較の上でその後の研究に有効な資料を提供している。さらにこの皿型土器は、北関東を中心とした地域では大江正行氏による編年作業がある(註3)。大江氏の編年は中世後半から戦国時代にかけてのものである。また安田龍太郎氏は栃木県の資料を中心に土師質土器と内耳土器を中心とした15・16世紀の年代観と問題点について触れている(註4)。貯蔵形態については、筆者が、埼玉、群馬、栃木県を中心とした、分布と特色について触

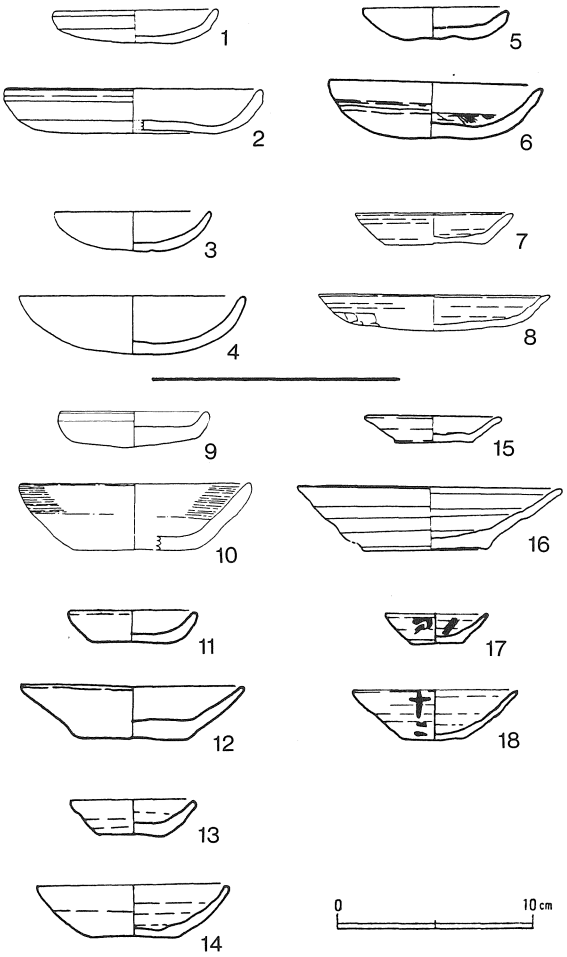
れている。この製品については大江氏によっても編年作業が行われている(註５)。煮炊形態については、中村倉司氏により、埼玉を中心とした内耳土器の編年作業がある(註６)。また、群馬県内では、最近の発掘調査において、中世遺跡の比重が比較的高く、多くの遺跡で主に14世紀から16世紀に至る在地産の土師質土器や瓦質土器に関する編年作業がなされている(註７)。また神奈川考古同人会が行った「古代末期～中世における在地系土器の諸問題」に関するシンポジウムでは、関東地域の土器編年を概括に把握するという、初めての試みが行われた。また、古代末期からの土師質土器の系譜をたどるべき指標を示した会でもあった。最近では、東国土器研究会により、古代から中世にかけての新資料が新たに呈示され、今後の中世土師質土器に関しての系譜に問題を投げかけた(註８)。

2　在地製品の構成

北関東において鎌倉時代から室町時代は日常雑器として生産された土器は、土師器系の製品(註９)と須恵器系陶器、瓦質土器（群馬県を中心とした北関東の研究者の一部には軟質陶器と呼称している）とがある(註10)。器種としては供膳形態（皿）・煮炊形態（釜・内耳土器・土釜）・調理形態（片口鉢・摺鉢）・貯蔵形態（壺）・その他（火鉢・香炉・盤）などがある。当然、地域と時代によって製品の偏りがある。ただ以前紹介した貯蔵形態の中には瓦質土器とはグルーピングできない焼成のものも存在するが、今回は便宜上一緒に扱った。そのような点を踏まえて、以下にこれらの製品について簡単に説明を加えてみたい。

(1)　土師質土器

皿形態のほか、香炉型土器や摺鉢の中にもこの範疇の製品があるようだが、資料を十分観察していないので明確な分析ができない。ここでは皿型のみを扱う。手づくね製品とロクロ製品の二種類が存在する。手づくね製の呼称については、異論のある方もあろうがここでは議論は避けたい。



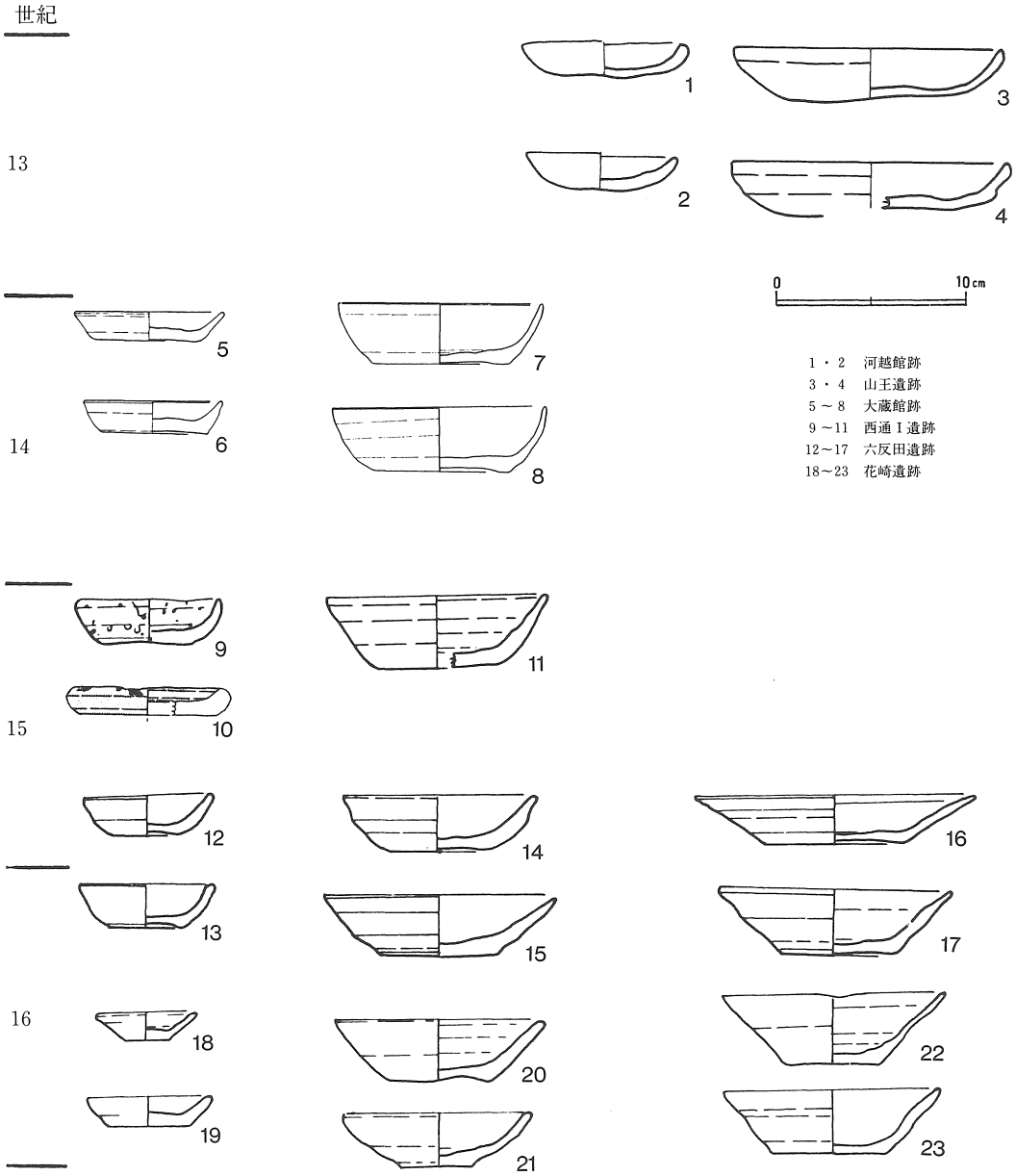
1･2.下古館西遺跡　3･4.屋代Ｂ遺跡　5･6.門毛経塚
7･8.小田原城　9･10.下古館遺跡　11･12.矢島遺跡
13･14.浜町屋敷内遺跡　15･16.見付端城跡　17･18.石那田遺跡

第１図　各地の土師質土器(上段手づくね製品)

手づくね製品(第１・２図)

中世に於いては鎌倉以西さらには北陸、東北に散在分布する製品であるが、関東に於いては、中世全般にわたり存在はしない。しかし、最近の中世遺跡の調査の進展で、13世紀前半代の遺跡では、この手づくね製品が関東各地で出土し始めている。13世紀前半代の形態は大きく大小の二タイプにわけて考えることができ、体部中程に稜を有し、底部が平底になるものである(第１図１・２)。

それに対してやや時代が下り、13世紀後葉に至ると大小のセットはそのままであり、大形品は体



第２図　埼玉県内における土師質土器の変遷
(１～４は手づくね、他はロクロ製品)

部から底部にかけては丸みの強い形状となり比較的規格性が強い(第1図3・4)。茨城、栃木などの地域では最近一遺跡でまとまった資料の出土がある。この資料は距離的に離れても、極端な地域差が認められない。基本的に14世紀に入ると、この製品の分布は希薄になってくるが、地域的には、14世紀中葉までは存在するように思われる。その製品は、大形品はやや規格性が崩れはじめ、小形品は体部を直立させたもの(第1図9)、口縁部に向かうに従って内側に折り曲げたものなどである。その後は空白となり、戦国時代の小田原においては、極めて多くの手づくねの製品が存在することがわかっている(註11)。

ロクロ製品(第2図)

中世全般にわたり最も多くの出土量を誇る製品である。12・13世紀前葉においては、北関東では遺跡の調査例も少ないが、現在の時点では殆ど見られない一群である。第2図は埼玉を中心とした大まかな分類であるが、14世紀代以降はロクロ製品しか見当たらない。基本的に大小のセットからなっており、時代が下るとともに体部が外反し、底部の縮小する傾向にあるように思われる。13世紀後半から14世紀に至るとロクロ製品は体部は丸みをもって立ち上がっている(5～8)。14世紀にいたると体部は直線的な作りへと移行していく。大・中・小のセットを構成する遺跡もある(12～17)。さらに下がって16世紀にいたると全体に底径が縮小している(18～23)。これらは特に15世紀から16世紀にかけては資料も多くあり、さらに細分が可能と考える。群馬県ではとりわけ多くの調査例があり、細分作業が多くなされている(註12)。

(2) 瓦質土器

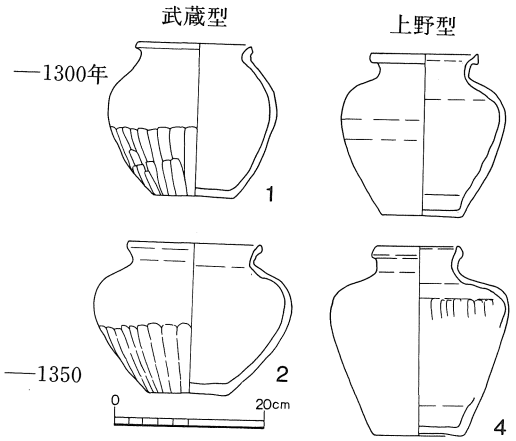
壺

本庄市には叩きを有する製品もあり、さらに整形技法などは瓦質の製品に類似した手法である、一方で、いぶし焼きのような仕上がりでなく、比較的焼き締まりの良い、須恵器的仕上がりのものなどもあり、総ての壺製品を瓦質土器と認識することは無理があり、須恵器系製品としての分類を行うべきものも存在するような気もする。この貯蔵形態は関東全域に分布するものでなく、限られた時期と地域のみ分布する特殊な製品である。後に説明を加える片口鉢と併焼されたものと考えられる。壺に関しては、基本的に二形態の製品がある。

上野型壺(第3図3・4)

群馬県東部から栃木県、さらに埼玉県北部にかけて分布する一群である(註13)。器形は球胴形のものと長胴形のものとがある。最大径が胴上位に位置する場合が多く、球胴形のものほど作りがシャープなものが多い。

図示した製品は二形態ある。壺は紐輪積み成形され、形状は胴の上位に最大径があるが、球胴に近い形である。口縁部は外に折り返しており、縁帯はシャープな作りである。器面



(1．青島城跡　2．東福院出土
3．小山城跡　4．千駄塚出土)

第3図　壺型製品

は口縁部から肩部にかけては丁寧な磨きを加え、胴下半は縦方向に磨きが施されている。いぶし焼きされており、焼成の良好なものは灰色を呈して、光沢がある。球胴形のものほど概して焼成が良く、形態の上でも比較的まとまりがある(3)。長胴形のものは前者に比して体部下半が直線的になっている。口縁部の折り返しが少なく、縁帯の作りは丸みが強い(4)。作りが概して長胴型の製品の方が退化した状況を呈しており、球胴型から長胴型への移行を想定したが、長胴型の製品にも口縁部の作りのシャープなものもあり、両型とも口縁径の比較的大きな製品が先行し、次第に口縁部の縮小とともに年代が下ってくる変化が想定される。ただし、球胴型にはあまり口径の小さなものは認められない。全体に製品の規格性が強い。

武蔵型壺(第3図1・2)

器形は球胴形のものが主体であるが、上野型に比して器形に不揃いさが目立つ。口縁部から肩にかけて横撫でされ、胴部下半は縦に箆削り整形が施されているものが多く、また上野型同様に磨きを施したものもある。焼成はやや悪く、灰黒褐色や赤褐色を呈するものが多い。ただし焼成の良好なものは明らかにいぶし焼きを行っておらず、表面が灰色の須恵器状のものもある。底径が大きく、胴径が器高より大きく偏平なものが多く見られるが、より偏平なものほど焼成が悪く、作りが全体に粗雑であることから前後関係があるように思われる。器形の上のみでなく焼成の上でも上野型に比して変化に富むことが指摘できる。上野型が規格性に富み、殆どの製品がいぶし焼きされているのに対して、多分に須恵器的製品のある事実は両者間に成立時点での異なりがあるのかも知れない。

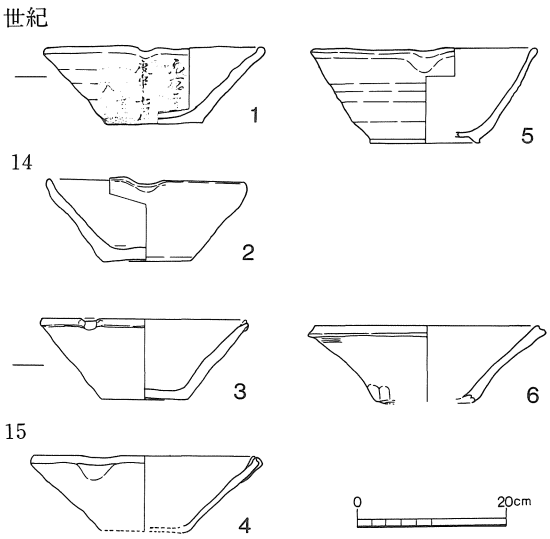
片口鉢・摺鉢

形態の上では地域差がかなりあることも事実だが、基本的には各地とも類似した出現年代と変化を認めることができる。また、片口鉢と摺鉢をここでは一元的に扱った。

片口鉢(第4図)

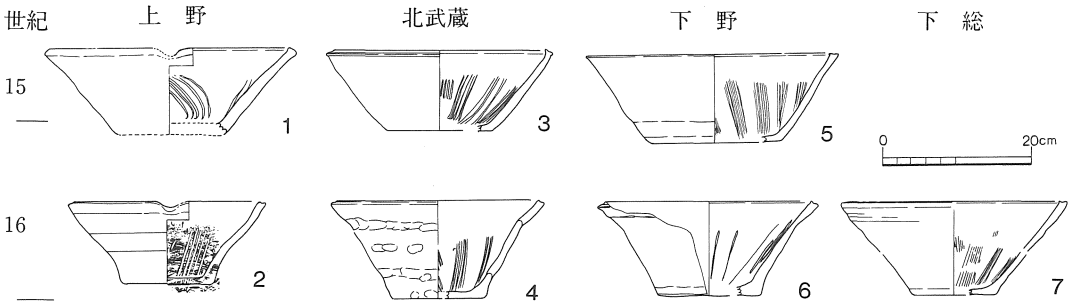
この製品の分布は、先に説明を加えた貯蔵形態の分布地域に比較的多く認められることから、同一工人による製作が想定される。ただし壺に見られたように形態上の差異はあまりないが、「武蔵型」の分布地域では、やはり焼き締まった須恵質のものも多い。類似品の分布範囲は、量的には少ないが、鎌倉や多摩ニュータウンなどでも確認されている(註14)。

片口鉢で唯一の紀年銘資料として、群馬県尾島町長楽寺の製品がある(第4図1)。紐作りで口縁部は丸みがあり僅かに内側に折り曲げている。体部はロクロ痕がよく残っている。底部は回転糸切り離しで、周辺部を箆削りを整形している。口縁部先端を



1. 長 楽 寺　3. 下古館遺跡　5. 中条遺跡群
2. 畠山重忠墓跡　4. 大 山 遺 跡　6. 下古館遺跡

第4図　片口鉢(在地産と搬入品)



1. 御布呂遺跡　2. 浜町屋敷内遺跡　3. 下椿遺跡
4. 花崎遺跡　5・6. 赤塚遺跡　7. 池ノ尻館跡

第5図　関東各地の摺鉢

やや尖りぎみに作る製品もある(第4図2)。両者に前後関係があるか否かは、現状では資料が不足しており、細分できない。次段階に位置づけられる製品の中にも口縁部が僅かに外側に折り曲げたものや、次の摺鉢に特徴的な口縁帯を両側に突出させたものなどがある(第4図)。その出現は長楽寺の紀年銘資料から考えても、少なくとも13世紀後葉か14世紀前葉には位置づけられる。そして、後半は摺鉢へ変化すると把握するならば、その転換期がいつ頃かが問題である。片口鉢の出現の背景に東海諸窯とのかかわりが重要な意義をなすものと思われるが(第4図5・6)、初期片口鉢も常滑などの製品と口縁部形態に類似性が指摘できるものもあり、ただ高台を有しない点などに大きな相違が指摘できる。

摺鉢(第5図)

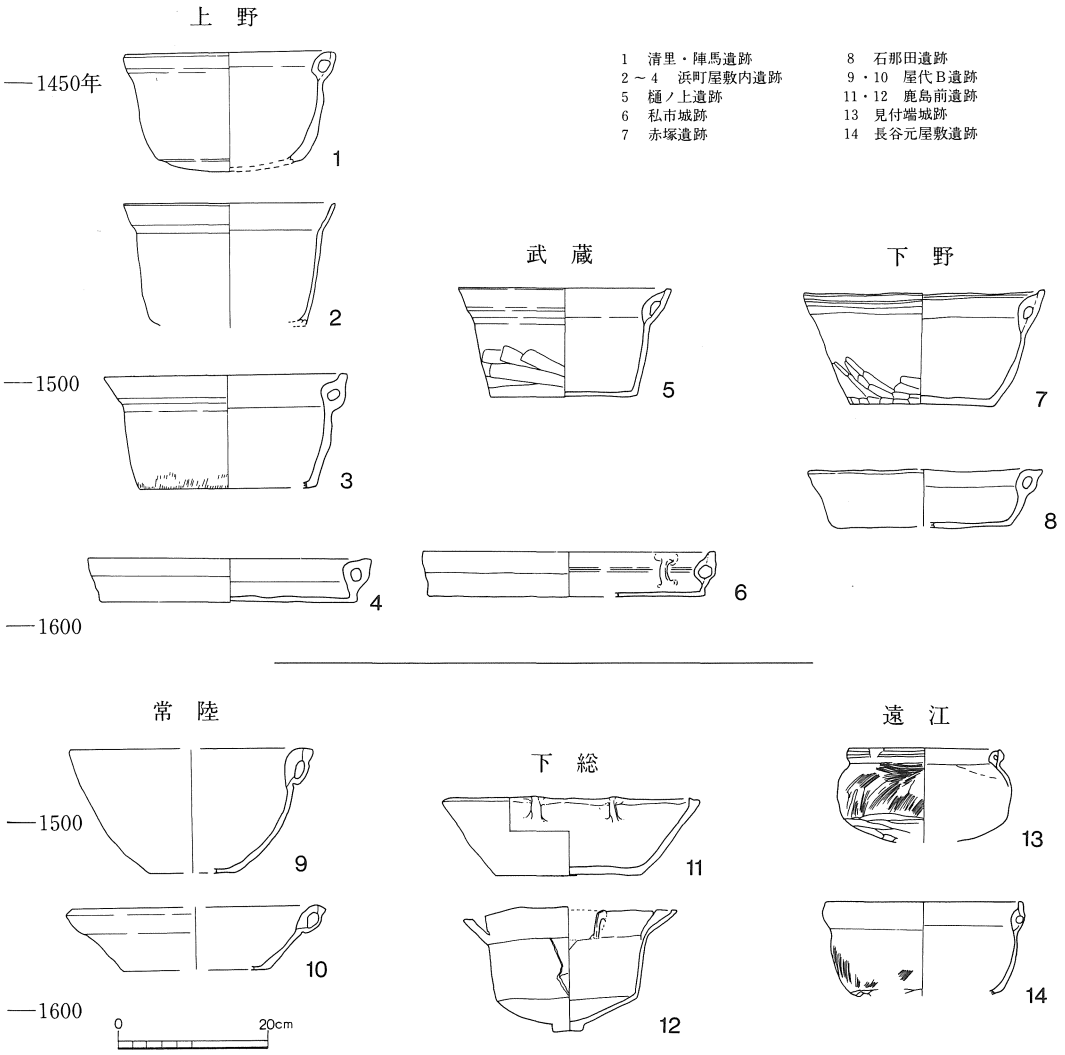
片口鉢と異なり、その分布は関東全域にわたっている。甲信地域には在地産の摺鉢は15世紀後葉以降はあまり多く見られなく、関東とは趣の異なる状況を呈している(註15)。関東でも地域間で多分の相違はあるが、基本的な変遷は類似する。片口鉢からの転換は15世紀前葉から中葉と考えられる。初期のものは、どの地域でも口縁端部を内側に折り曲げたものや、両側に突出した形状のものが多く、器高と口径との比がおよそ1対3程あり、やや偏平びみの形状を呈する。16世紀のものは口唇部を平らに作り、そこに溝を施し、器高と口径との比がおよそ1対2ほどで、深めな感じの型式のものが主体である。16世紀段階の製品は赤褐色や黄褐色を呈した軟質で、土師質的な製品が多いことも指摘できる。旧国単位ぐらいでの分類も可能であろうか。

内耳土器

いわゆる「ほうろく」と深目の鍋を合わせて内耳土器と把握しているが、焼成及び口縁部付近の作りは、極めて類似しており、明らかに同一工人による製品であろう。安田龍太郎氏は器の高さの異なりから鍋型、浅鉢型、ほうろく型に分類されているが、地域差や機能的な面を考慮しても二形態の分離で十分ではないだろうか、いずれにしろ機能面についてもう少し検討する必要はあろう。

内耳鍋(第6図)

関東及び静岡、長野などに分布する。形態の上でかなり地域差があることを指摘できる。静岡のものは、14世紀代に出現を考えており、15世紀が資料がなく、16世紀に最盛期を設定している。16



第6図　関東各地の内耳鍋類

世紀前葉のものは(13)、浅い楕円形の胴部を呈し、口縁部は「く」の字状に外反するものと、直立するものがある。次段階は底部が平底に近いものもあり、また口縁部のくびれが緩やかになる傾向が窺える(14)。体部の整形は上位は撫で、下位は削り整形が行われている(註16)。茨城から千葉県にかけて分布する製品は、体部が摺鉢状に傾斜した立ち上がりを呈するものが多い(9・10)。そして、深目のものは体部に丸みをもっている。また口縁部の耳の付された部分が極端なくびれを呈するものが少ない。図示したものは年代は15世紀後葉から16世紀前葉にかけてと推測される(註17)。関東の埼玉、群馬さらに長野県内の製品は形態の上で、類似点が多く認められる。群馬県に於いては調査例が多く、その細分が進んでおり、ほぼその変遷は統一的な見解が示されているので、上野国分僧・尼寺中間遺跡の編年を参考に触れて見たい(註18)。内耳鍋の初現を14世紀後葉においており、その後をおおよそ5期に分けている。1期は口縁部が短い段階(1)、2期は口縁部が外反化し頸

部のくびれが鋭くなる段階、3期は底が平底化する段階、4期は器壁が薄くなり、頸部にくびれが認められる段階(2)、5期は体部が直線的になる段階としている(註19)。要約すれば、時代とともに口縁部のくびれの明瞭化、底部の丸底から平底への変化が想定されよう。私の序列はやや異なり、大まかな分類である。一般的にこの製品が耳の付された鉄製品の鍋(12)の模倣から来たものと考えられており、その類例は我孫子市鹿島前遺跡などで出土しているが(註20)、口縁部は屈曲の明瞭な点が鉄製品に類似している一方で底部は丸底のものほど鉄製品に類似している。流れとしては基本的に群馬の変遷は首肯できよう。しかし、現在埼玉の資料などを見る限り、その資料の少なさを考慮する必要があろうが、初現を14世紀に遡らせるものは、共伴物などから見て、少々無理と思われる。

ほうろく(第6図)

浅く体部の立ち上がりも、5cm前後のものが主体である。耳の両端が体部で収まるものから一端が底部に付されるものへと変化するものと考えられる。もっとも底部に付くものは、17世紀に至ってから出現するものと考えられる。

釜(第8図1)

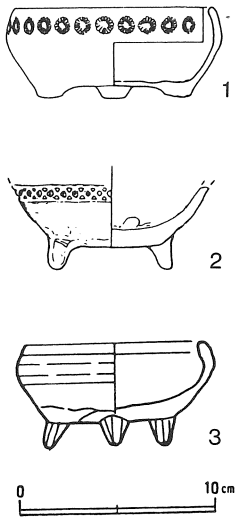
図示した資料は比企郡小川町中城遺跡出土の資料である(註21)。最近の調査例からその数は増しているが類型化するほど検出していない。今後の資料の増加待ちであろう。

香炉(第7図)

この製品も最近、群馬、埼玉などにおいて多数の資料が検出されている。上野国分僧・尼寺中間遺跡の報告に群馬県出土の製品の集成と年代観が示されている。基本的には古瀬戸製品の模倣にその初現を求めることは問題ないと思われる。そして、興味を引かれる点は土師質土器皿と形態の上で類似性を認めることができると考え、香炉を土師質土器の範疇に分類している点である。形態上、皿製品と類似するかは資料の実見を行っていないので判断できないが、土師質土器として、皿製品と同一工人によって、製作されたとする見解は注目すべき指摘と考える(註22)。

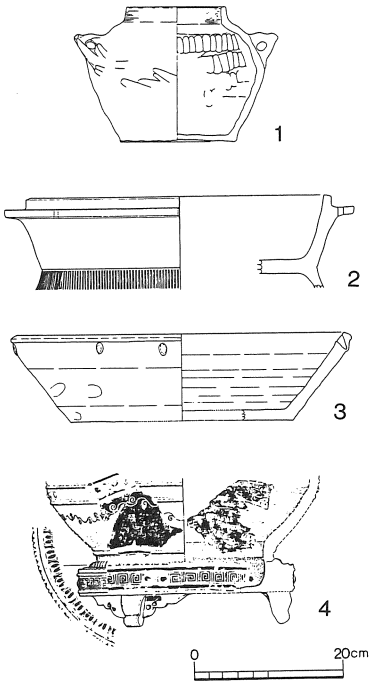
土釜

最近、関東全域で徐々に出土し始めているが、その絶対量は少なく、圧倒的に鎌倉の出土が多い。既に馬淵氏により、詳細な煮炊具の論文があり(註23)、そこに同種についても触れられている。氏も指摘しているように、製品は器表面を刷毛目整形しており、関東の中世在地土器には見られない技術



1.上野国分僧寺　2.下郷遺跡　3.大山遺跡

第7図　香炉



1.中城館跡　2.大蔵館跡
3.下古館跡　4.長 楽 寺

第8図　火鉢類

を使っており、一概に在地産と判断できない。今後の資料の増加を待って検討を加えたい。

火鉢(第8図)

中世全般にわたって存在するものと考えられる。しかし、多くは15世紀以降に所属するものと考えられ、関東各地の遺跡からおびただしい数の出土が確認されている。平面形が方形・円形のものが多く、口縁部は直立・内傾するものなどがある。そして口縁部には菊花文や雷文などをあしらったものが多くある。底部には猫足などの足が付されている。完形品が比較的少ない点などがあり、また、あまり注目対象ともならず、分類が不十分である。畿内からの搬入品と在地製品との見極めも今後の課題であろう。

盤

鎌倉の各遺跡で多く確認されている。実際火鉢などとして使用される場合の方が多いようにも考えられる。馬淵氏はむしろ火鉢と規定しておられ、実際の使用では煮炊具としての機能も述べている。年代的には13～14世紀代に中心があるように思われ、大江氏は内耳のほうろくとのかかわりについて触れているが(註24)、ほうろく型の主体的時期が16世紀後葉以降と考えられ、盤型との連続は現状では結論付けられない。

3　在地製品の変遷

在地産と思われる製品について個々に見てきたが、その変遷を北関東を中心に見て行こう。

(1)　第1段階（12世紀末葉～13世紀前葉）

在地製品と把握できるものは土師質土器皿が主体であり、他の種類のものはほとんど認められない段階である。

遺跡としては埼玉県嵐山町山王遺跡、川越市河越館跡、茨城県門毛経塚、屋代B遺跡などがあり、茨城、栃木方面での出土が比較的多い(註25)。都市としての鎌倉と農村地域としてのこれらの遺跡とは調査数の上で大きな開きがあり、遺物の組成の比較も単純にはできないであろうが、土師質土器の形態は類似点を多く認めることができる。しかし鎌倉では12世紀末葉からすでにロクロ製品が存在するのに対して北関東全域は手づくねの製品のみの確認である。最近、多摩丘陵周辺の遺跡では、12世紀代の遺跡が確認され始めており、その中にはロクロ製品の土師質土器の皿の存在が示唆され始めた(註26)。即ち古代末葉に土師質土器としてとらえた小形のロクロ使用の皿型土器から中世のロクロ製品に系譜をたどろうとする考えである。しかし11世紀代の遺跡の比較的多く分布する埼玉から北関東に於いて、13世紀に至ってもロクロ製品がほとんど確認できなく、むしろ確認されるのは手づくね製品であることは奇異なことである。

12世紀から13世紀前葉における土師質土器（取りわけ手づくね製品が多い）の分布は関東、東北に広く散在することは先にも述べたが、遺跡の性格は特殊な場合が多く、非日常的な使用形態が目につく。古代末期において関東周辺の農村域で極めて日常的意味合いで使用されたロクロ製品の土師質土器は、いつしか畿内からもたらされた手づくね製品とともに非日常的な製品に転換してしまった。この辺の機能的差異に単純に古代末期の土師質土器との一元的把握に若干の疑問を持つ。しかし次段階では、遺跡自体は居館跡などが多いが、比較的日常的側面が強まってきたような気配が

ある。

供膳形態は、12世紀以降も土師質土器の皿生産は続くが、椀の生産は確認できない。関東の中世前半代の在地製品の土器構成はこの椀と煮沸形態欠落が大きな特徴である。

(2) 第2段階（13世紀後葉～14世紀前葉）

在地産として考えられる瓦質土器の出現段階であり、貯蔵形態の壺、調理形態の片口鉢の二形態がある。土師質土器は鎌倉ではロクロ製品が主体であるが、北関東に於いてはこの段階の前半まではまだ手づくね製品が多いように思われ、次第にロクロ製品へ転換していく。

土師質土器については、埼玉と他の北関東地域とでは編年に異なりがあると考えていた。この差は、北関東では13世紀代にほとんどロクロ製品がなく、手づくね製品のみの単純遺跡が主体と思われ(註27)、一方埼玉の同時代の大蔵館跡などではロクロ製品のみの出土状況である(註28)。地域的差異の現れかとも想定できるが、むしろ大蔵館跡のようなロクロ製品のみを出土する遺跡は後出する遺跡と考えたほうが良いのかも知れない。そこで13世紀代までがほぼ手づくね製品主体、14世紀前葉が両者の共伴する時期、そして14世紀中葉以降ロクロ製品に転換する段階を経ると考えておきたい。これはあくまでも現状でのことであり、13世紀にロクロ製品の共伴する遺跡が検出される可能性は強い。

瓦質製品を出土する主要な遺跡は墳墓と居館跡などであり、北関東を中心に分布する。在地産の壺はその大半が墳墓からの出土である。埼玉県内では13世紀から14世紀にかけて蔵骨器に使用された土器類のおよそ6割近くが、この在地産の壺によって占められており、残りが常滑、古瀬戸、渥美そして若干の中国陶磁器であった。また、居館跡などからは、常滑の甕や片口鉢の出土が確認できるが、それ以上に在地産の片口鉢の出土が多い。しかし個別の遺物説明の所でも述べたが、壺型の出土分布は限定された地域でのものであり、同時に生産されたと考えられる片口鉢も濃密に分布する範囲は限定される。

煮炊形態については、殆ど確認出来ないのが現状である。しかし、一部に片口鉢を煮炊具として使用したとの考えもあり、鉄製品など他の材質に求めることも安直に結論づけられない。これ以降の時代も土器製の煮炊形態は一時的に出現するが、あまり長くは継続しない。

搬入品については、先に述べたように、東海諸窯製品の中でも常滑製品の占める割合が高く、その出土状況については、赤羽氏によって詳細にまとめられている(註29)。このような常滑製品の関東に於ける役割を鑑み、さらに北関東でも内陸部のみに分布する当該製品の状況は、多分に常滑製品の補完的役割の強いものであったろう。

(3) 第3段階（14世紀後葉～15世紀前葉）

貯蔵形態の壺型はその姿を殆ど消してしまう。そして調理形態の片口鉢に加わり、新たに煮炊形態の鍋などの出現がある時期であり、在地製品の器種が増加する段階と考えられる。土師質土器は引き続き存在する。しかしロクロ成形のもののみで、手づくねの製品は姿を消してしまう。

遺跡としては栃木県下古館遺跡が著名であるが、最近群馬県などを中心に同期の居館跡などの調査例が報告されている(註30)。

片口鉢は口縁部の両端を上下に僅かに突出させたものや、内側に折り曲げたものなどがあり、次

段階の摺鉢に類似した形状のものがあり、摺鉢の生産も15世紀の前葉あたりで開始されたものと考えたい。この片口鉢の分布は前段階同様、南関東の方ではあまり例をみない。

煮炊形態については土釜の出土が量的には少ないが、関東各地で確認され始めている。しかし、先に述べたように、今一つ在地製品としての積極的根拠を見いだせない。群馬県に於いては14世紀後葉に内耳鍋の出現を想定しているが、発掘調査例の共伴遺物などから推測して、14世紀代に遡る資料を私は見い出していない。しかし遅くとも15世紀の前葉にはその出現は考えられよう。ただし、隆盛するのは次段階のことであろう。

搬入品は次第に常滑製品の減少が窺え、その一方で古瀬戸製品の増加が明らかである。この事は在地製品の生産状況にも著しい変化をもたらした一要因でもあろう。その端的な例が摺鉢の生産の開始である。確認できる範囲では少なくとも、15世紀中頃には器内面に条線を持つ摺鉢の出現が確認できる。このことは明らかに搬入品と呼応し、在地製品の器種に変化があったものと判断できる。ただ摺鉢は従来の片口鉢の分布地域のみならずさらに広域的なひろがりを示しており、総ての地域の製品が、前代の片口鉢の生産と一元的な生産態勢の中で醸成されたものとも判断できない。しかし片口鉢の分布地域では瓦質である点や器形の類似性などから生産の転換は比較的スムーズな移行が可能であったと考えられる。

(4) 第4段階（15世紀後葉～16世紀前葉）

前段階を受け、在地の瓦質製品が量的に最も多く確認される段階であり、瓦質土器の隆盛期と位置付けられる。

資料の大半は居館跡などからの出土品である。いわゆる「方形館」と称される居館跡の中には戦国初期に形成されたと考える形態のものがあり、北関東各地に同種の分布が確認でき、資料の比較を行うのに有効な遺構である。橋口定志氏により、詳細な分類と比較検討が行われている(註31)。

さて、瓦質土器の内煮炊形態は内耳鍋のもっとも多用される時期と考えられる。その分布は静岡以東の関東、甲・信地域に特徴的な製品であるが、その分布のに東京、埼玉、群馬、長野などに分布する一群、茨城、千葉に分布する一群、さらに西の静岡を中心に分布する一群に形態上分けられるような気がする(註32)。資料を十分収集していない上での憶測なので、その辺りはご了承頂きたい。後日詳細について触れる予定である。

調理形態の片口鉢は完全に姿を消して、総て摺鉢となる。初期のものは浅めであるのに対して、次第に深めになる傾向が指摘できる。その他火鉢、香炉など多くの資料の確認がなされている。

搬入品は古瀬戸末期の製品、さらには大窯Ⅰ期段階の資料が中心に共伴している。前段階に比して、大量の搬入品の各器種がもたらされている。中でも調理形態の摺鉢は在地産の製品の増大にかかわらず多く出土する製品である。

供膳形態については、土師質土器が引き続き、皿型土器を中心に確認されている。興味を引く点は非常に類似した形態が広域的に分布する点である。その好例が手づくね製品の分布主体である静岡の見付端城跡のロクロ製品は、埼玉や群馬周辺の製品と極似している(第1図)。ロクロ製品の土師質土器の皿が決して関東以東のみに主体的に存在するものでないことを語っている。

また搬入品の大窯製品の占める割合がこの形態でも増加する傾向である。

(5) 第5段階（16世紀前葉～16世紀後葉）

瓦質製品は引き続き存在するが、時代が下がるとともに次第に器種に減少傾向が認められ、一面では、中世的な器種が次第に淘汰される段階とも考えられる。

出土遺跡としては、埼玉県の花崎遺跡、私市城跡など多くの遺跡がある。後北条氏関係の城館跡の多くはこの時期の資料を出土する(註33)。ただ遺跡として前段階から連続して存続するものが多く、遺物の上での複合的状況は非常に多い。天正18年の後北条氏の滅亡をもって、城の滅亡が想定されるが、調査例のいくつかは、さらに継続して使用されたものも多い。

調理形態の摺鉢は瓦質という表現より、土師質的色彩の強いものも多く認められる。大窯製品も相変わらず多く出土する。前段階に主流を成した深めの内耳鍋が次第に姿を消して行き、浅めの「ほうろく」が出土しはじめた。鍋に互換する機能の形態とは思われないが、形状や作りから、同一工人の製作であろう(註34)。近世以降に繁く使用される「ほうろく」の出現や摺鉢に見られる瓦質的特徴の希薄が一層中世的器種構成と特徴が薄れていくような感じを抱かせる。

4　在地製品の系譜

前段で関東及び周辺に於ける在地系製品の変遷について述べてきたが、ここで土師質土器と瓦質土器について、その成立にかかわる契機について見てみる。

土師質土器の手づくね製品は、形態の特徴から系譜は明らかに畿内に求められよう。また16世紀代に小田原や小山市などで出土したものは、中世前葉に隆盛したものが潜在して継承され、再度、出現したとは考えられない。それぞれ、当時の畿内とのかかわりの中で影響を受け出現したと考えるべきであろうか。ロクロ製品については、先にも述べたように関東の古代末期土器にそれを求めることが比較的素直であろうが、現状では明確に系譜をたどることができないことを指摘しておく。いずれにしろこの製品の解明は、鎌倉以外の関東地域で12～13世紀段階の資料の実態を明確にすべきことである。

瓦質製品の初期製品である壺について見ると、武蔵型にしろ上野型にしても古代から中世に須恵器生産が連続的に変質していったものとは単純に捉えることができない事をまず指摘して、従来これら総てを須恵器系と規定した点については訂正する必要があろう。両形態とも古代の窯業地帯に分布する状況や、古代須恵器の中に球胴形の壺などを認める事ができ、若干の類似点を指摘できる。しかし生産跡が確認できない点や、先にも述べたように10世紀代の須恵器生産が衰退していく過程において、既に壺・甕類の器種については、殆ど実態がわからないのが実状であり、当該資料までの年代的空白が余りに大きすぎる。ただ一部の資料に叩きを有して、体部下半にけずりを施した製品が見られ(註35)、須恵器系陶器の概念に近い甕の存在を否定することもできない。特に「武蔵型」の中には焼成も極めて良い須恵質のものから瓦質なものまであり、器種の形態の類似性のみで包括的に扱ったのはやや早計であったのかも知れない。そして「上野型」、「武蔵型」とも、中でも「上野型」に多く認められる整形の特徴として体部の磨き整形に加えて、低火度焼成で、いぶし焼きを行っており、極めて軟質な焼成である点は、むしろ瓦器の概念に近い。しかしその一方で叩き、ハケ調整などの西日本の瓦質土器に認められる整形上の特徴は確認できない。このように一部の調整技

術や形態に相異はあるが、西日本との間に焼成技術など幾つかの共通点もあり、少なからずその成立に影響があったと考えたい。器形については、当時関東地域が東海諸窯、中でも常滑の流通圏に組み込まれていたことを考え合わせれば、少なくとも東播系などの須恵器系製品の支配的な流通圏であべた西日本とはおのずから形態が異なるであろう。即ち在地産の壺が常滑の補完的位置をなすものであり、多分にそれら常滑の壺などの器形の模倣中から出てきたものと考えられる。

西日本においては、瓦器椀の生産を軸として、各種瓦器製品の生産が、瓦工人や土師質土器工人などとのかかわりの中で中世的生産態勢を各地域で形成していった。一方関東でも古代の須恵器生産などの影響も少なからず保持しながら、やはり、西日本のように様々な生産態勢が加味され、中世的生産態勢を生み出したのであろう。しかし、そのあたりの生産集団の系譜の異なりや統制の取れた生産構造の異なりなどが「武蔵型」に見られる須恵器的なものや瓦質的なものなどの器形の不揃いさに現れたり、または規格性に富んだ製品である「上野型」なって現れたと考えたい。そして、器形の陶汰を経て、同一系譜上に摺鉢、内耳鍋の生産へと変化を遂げる。いずれも決め手を欠き憶測の域を出ない。今後の中世土器の生産跡の調査が待たれる。

おわりに

関東周辺で生産された在地産と考えられる土器について見てきたが、それらは居館跡などの資料が多く、庶民の使用していた土器をそのまま総て反映していたとは判断出来ないであろうが、大局的には、一部の搬入品などを除けば以上のような状況と考えられよう。以下に簡単に当該地域の在地産の土器構成の特徴と画期について要約してみたい。

供膳形態は土師質土器皿の生産が確認できるのみであり、終始皿、若しくは杯型のみであり、全時代を通じて椀型が確認できなかった（註36)。貯蔵形態は群馬・埼玉・栃木にかけて、13世紀末から14世紀前葉にかけた時期のみに見られる。煮炊形態についても、中世前葉には、関東全域にわたって殆ど認められない状況がある。鎌倉出土の煮炊形態のなかには、瓦質の土釜などが認められるが、それらは関東全域に普遍的には出土していない(註37)。煮炊形態の在地産の明瞭な出現は、15世紀前葉ないしは15世紀中葉に至ってからの、内耳鍋の出現が明確なものである。調理形態は13世紀末から14世紀前葉に片口鉢が出現し、15世紀前半に至って次第に摺鉢に転換していったものと考えられる。その他、盤・火鉢・香炉などの製品があるが、中世の前半代にもわずかに認められるが、主体となって出土し始めるのは、15世紀前葉以降に至ってからと判断される。このような点から在地系土器から見た流れは、貯蔵形態が出現する第2期に初現があり、そして第3期から第4期に至る過程は在地産製品の確立期と考えた。そして第4期から5期に至る過程は、在地製品の上でも次第に器種の減少傾向があるように思われ、その出現期は東海諸窯でも古瀬戸中期窯式の成立期であり、在地製品の拡大生産がある15世紀後葉は、古瀬戸末期から大窯期への移行期であり、大量の陶器がもたらされる時期でもある。このような在地産土器の出現と展開の背景には、古代後半から東海諸窯を中心とした搬入陶器の流通が常に影響を与えてきた。そして、前葉では、壺、片口鉢に見られるように、搬入品の補完的役割を担う製品が比較的目につくのに対して、後葉は内耳鍋や「ほうろく」に見られるように、搬入品との間に機能的分担関係が明瞭なものとなって行き、一層近世

的な土器の使用形態の在り方に移行して行く。

今回は在地産の製品とはどのようなものがあるだろうか、という疑問からはじまったものでその、種類を羅列したに過ぎなく、十分な資料の収集や分析を行うに至らなかった。例えば、それは、瓦質土器、土師質土器などと言う表現を見れば、その実態の把握が不十分であることを示しているのかもしれない。また、製品の機能的側面や、個々の製品の各時代に於ける役割の認識が不十分な証拠かもしれない。資料を感覚的に見ての判断が多く、化学的分析などを行うなどして、今後の調査を進めていきたい。

尚、本稿は当事業団研究助成の成果の一部である。

最後に、種々のご教示を下さいました吉岡康暢、小野正敏、井上喜久男、渡辺一、服部実喜の諸先生方にお礼申し上げます。

註

1．浅野晴樹「埼玉県出土の中世陶器(2)」『埼玉県立歴史資料館紀要５』1983

2．服部実喜「中世都市鎌倉における出土かわらけの編年的位置づけについて」『神奈川考古第19号』1984

3．大江正行「群馬県と周辺地域の中世土師質土器皿」『群馬考古通信７号』1980

4．安田龍太郎「中世土師器と内耳土器」『野州史学第５号』1981

5．大江正行「軟質陶器について」『月報鳥羽遺跡No14』1980

6．中村倉司「内耳土器の編年とその問題」『土曜考古創刊号』1979

7．大江正行「清里・陣馬遺跡」㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1981

群馬県教育委員会「上野国分寺・尼寺地中間地域」1986

8．神奈川考古同人会「シンポジウム古代末期～中世における在地系土器の諸問題」『神奈川考町第21号』1986

9．関東では中世全般にわたり、土師器の皿形態をかわらけもしくは土師質土器と称している。そして、その主体となるのはロクロ製品であり、その系譜を古代の土器にもとめることは、ほぼ統一された意見であろう。福田健司氏は、中世土師質土器につながる土器を須恵系土師質土器と呼称した。またそれらを、土師質土器、ロクロ土師器と呼称する者も多い。(福田健司「特集　1986年の考古学界の動向―古代、東日本―」考古学ジャーナル　(1987)

服部実喜氏等は中世のかわらけを器内面の横ナデ調製、さらには底部の板状圧痕をもって「かわらけ」と呼称した。かわらけの中世的歴史性を考えるならば適切な呼び名と思われる。ただかわらけの場合は皿形態のみである。先の福田氏の須恵系土師質土器も、その初現的段階では適切であろうが、中世段階に至って、その呼称は、あまり適切とも思われない。また、土師品の呼称も同様に違和感がある。歴史性、系譜、形態などの要素で何を重視するのかによって呼称が変わる。やや消極的だが、ここでは土師質土器とする。

10．菅原正明「畿内における中世土器の生産と流通」『藤沢一夫先生古希記念古文化論叢』1984

菅原正明「瓦器椀製作技術の評価をめぐって」『大阪文化誌第18号』1985

菅原氏に瓦器は最終段階で低火度還元焔焼成された軟質の土器を指し、「瓦質土器」と呼称されてきた大形品も瓦器の範囲に入るとした。椀が水ひされた、きめこまかな胎土で、いぶし焼きされているのに

対して、大形品は胎土が砂粒を含み、いぶし焼きを行わないものもある、と規定されている。また瓦質土器は広義には土師器系の中に包括されようが、その特徴と成立状況を考えると、単純に土師器系と系列化できない点もあり、ここでは消極的であるが瓦質土器とした。

11. 最近の調査で茨城県や栃木県小山市などで中世前葉の出土品が確認され始めた。小山市では16世紀代と思われる手づくねの製品の出土している。筆者実見。

12. 註7に同じ

13. 群馬県や栃木県では、この形状の製品を「金井焼」と称している。群馬県金井丘陵周辺での焼成を想定しての名称であろうが、生産跡なども確認されていない現状では適切な名称とは思われない。

14. 服部実喜氏のご教示によれば鎌倉蔵屋敷遺跡などで出土が確認されている。

加藤修他「中・近世陶磁器から見た多摩ニュータウン遺跡の様相(1)」『東京都埋蔵文化財センター研究論集V』1987

15. 鋤柄俊夫「中世信濃における陶磁器の産地構成と流通」『信濃第38巻4号』1986信濃でも在地産の摺鉢が北信から中信にかけて分布するが、いずれも14〜15世紀を主体とするようだ。

16. 鈴木節司「見付端城発掘調査概報」磐田市教育委員会　1986

後藤健一「長谷元屋敷遺跡」湖西市教育委員会　1987

口縁などに若干の異なりはあるが、伊勢系の鍋に体部から底部への丸みのある形状や製形技法にも類似性が認められる。遠江周辺には伊勢系鍋の搬入も多く認められている。内耳鍋の文化圏が関東を中心とするなら、その折衷的製品と判断できなくもない。

17. 鈴木美治「屋代B遺跡II」『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書15』1987

18. 註7に同じ

19. 元島名遺跡や清里陣馬遺跡出土の資料が比較的初期のものとして位置づけられているが、新しい段階に位置付けたものの個体差ではないか。

五十嵐信「元島名遺跡」高崎市教育委員会　1979

20. 我孫子市教育委員会「鹿島前遺跡」1981　中・近世の墓壙から鉄鍋が出土していた。近世のものもあるようだ。耳を付した鉄製の鍋は西日本にもなく、その系譜は不明な点が多い。この鉄製品の解明が土製品の年代観を明瞭にする。

21. 梅沢太久夫「中城跡発掘調査報告書」小川町教育委員会　1981

22. 註7同じ

23. 馬淵和雄「中世都市鎌倉の煮炊様態」『青山考古』1987

24. 盤型からほうろくへの連続性を示唆されているが(註7清里陣馬遺跡)、製品の使用年代や機能面に開きがありすぎるように思われる。

25. 川越市教育委員会「河越氏館跡発掘調査報告書」1976

阿久津久「門毛経塚遺跡と中世陶器」『茨城県歴史館報12』1985

田代隆他「自治医科大学周辺地区」㈶栃木県文化振興事業団　1987

26. 東国土器研究会「東日本における中世土器研究の現状」『第1回東国中世土器研究集会研究報告資料』1987

27. 註17に同じ　また（岩崎卓也「日向遺跡　昭和54・55年度発掘調査概報」筑波町教育委員会　1981）

28. 寺社下博「中条遺跡群・権現山古墳・常光院東遺跡」熊谷市教育委員会　1982

植木弘「大蔵館跡」『嵐山町埋蔵文化財調査報告３』1987

年代は13世紀後葉から14世紀前葉が考えらられているが、もう少し新しくてもよいかもしれない。

29. 赤羽一郎「関東における中世常滑窯製品の出土分布」『愛知県陶磁資料館研究紀要３』1984

30. 註７に同じ

31. 橋口定志「中世居館の再検討」『東京考古第５号』1987　橋口氏の分類でⅠ種２類－Ｃ種グループのものが主体である。埼玉県では河越氏館跡、新倉館跡、黒沢館跡、群馬では寺ノ内館跡、矢島館跡など多くの例がある。

32. 関口修他「矢島遺跡・御布呂遺跡」高崎市教育委員会　1979

岩淵一夫「赤塚遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告書第36集』1981

宮昌之「ささら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原」『㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第24集』1982

梅沢太久夫他「六反田」六反田遺跡調査会　1981

岡本幸男「武蔵新倉館」美里町教育委員会　1980

など関連遺跡は多い。

33. 埼玉県内を始めとして、後北条氏に拘わる遺跡がこの段階にあたり、遺跡の数は多い。

塩野博他「私市城跡」騎西町教育委員会　1981

渡辺一「花崎遺跡」加須市教育委員会　1983

34. 註４に同じ　安田氏は内耳土器を鍋、浅鉢、ほうろくの三形態に分け、それぞれ用途を別にすれば、15世紀には三者の共伴が考えられようと述べておられる。しかしほうらく型は15世紀にはほとんど見ない。

35. 国学院大学考古学資料室要覧「蔵骨器」1974

浅野晴樹「埼玉県出土の中世陶器(1)」『埼玉県立歴史資料館紀要第３号』1981

上記資料のほか、栃木県田沼町でも、全面叩きのある胴丸で広口の甕が、出土している。

36. 畿内における瓦器、東海地方における山茶椀に対応すべる椀は土器製ではまったく確認されていない。やはり漆椀などの存在を想定する必要があろうか。

37. 煮炊形態については、11世紀段階の甕類の確認以後、在地製品は内耳鍋の出現まで、まったく姿をみない。その間は、鉄製の鍋類を考えるのが、もっとも素直であろうか。先の椀同様、東日本に特徴的分布する製品とは思われない。今後、両製品の存在がより明確な形で把握される必要があろう。

研究紀要　第4号

1988

昭和63年1月25日　印　刷

昭和63年1月30日　発　行

発　行　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒331 大宮市櫛引町2-499　0486-52-2231

印　刷　関東図書株式会社